

道徳判断と動機づけ問題の新たな側面

山本 圭一郎

はじめに

ある人が〈道端に落ちていた財布を交番に届けるのは道徳的に正しい〉と判断しても、その財布を交番に届けないということは考えられるのだろうか。こうした道徳判断と動機づけに関する道徳心理学的問題をめぐって激しい論争がメタ倫理学上で繰り広げられてきた。そこでは内在主義と外在主義が攻防戦を展開し、たとえば前者を擁護するマイケル・スミス (Smith 1994, 1997) と後者を支持するディヴィッド・ブリंक (Brink 1997) による議論の応酬は記憶に残るところであろう。大雑把に言えば、内在主義とは、道徳判断と行為への動機づけとの間に何らかの内在的・概念的な結びつきがあることを肯定する立場である。これに対し、外在主義はそのような結びつきを否定する立場である。

その一方で近年、この問題は以前とは異なる様相を呈するようになったようにも見える。というのは、発達心理学や脳神経科学の研究成果を踏まえて、道徳判断と動機との関係を検討する潮流が生まれたからである。これは、既存の倫理学における問題や概念などを最新の脳神経科学研究を踏襲して吟味しようとする「倫理の脳神経科学」における動向のひとつであるとも言えるだろう¹。ここでは内在主義の中でも、道徳判断と心理学的な動機づけが内在的・必然的に

¹ 「倫理の脳神経科学」については Illes (2006: ix-x) および林 (2007:74-5) も参照のこと。

結びついていると捉える動機内在主義が焦点となる。たとえば、動機内在主義によれば、ある人は〈 ϕ することは道徳的に正しい〉と誠実に判断を下しているとしたら、 ϕ するよう必然的に動機づけられることになる。

本報告では、こうした道徳判断と動機づけ問題に関する近年の動向を概観するために、アディナ・ロスキーズ (Roskies 2003, 2008)²、ジェネット・ケネットとコーデリア・ファイン (Kennett and Fine 2008a, 2008b)³、およびマイケル・スミス (Smith 2008) の間で繰り広げられた論争を取り上げる。そのうえ、彼らの論点に関係する範囲内で、最近の脳神経科学にもとづいてこの問題に取り組んでいるティモシー・シュローダー、アディナ・ロスキーズ、ショーン・ニコルズ (Schroeder, Roskies, and Nichols 2010) らの議論も見ることとする⁴。これらの議論は、発達心理学や脳神経科学にもとづいた道徳判断と動機づけ問題に関する論点すべてを含んでいるとは言えないまでも、その中心的なものを扱っている。この点で彼らの議論を概観することは、その問題に関する近年の主な動向を理解するうえで大いに役立つ。そして、彼らの錯綜した議論から主要な論点を整理し紹介することが、本報告の目的である。本報告のおおまかな流れを述べておけば、第一節では発達心理学の知見にもとづいた道徳判断と動機づけ問題を、第二節においては脳神経科学とその問題をめぐる論争を、最後の

² Adina Roskies は、UC サンディエゴで脳神経科学・認知科学の博士号を、さらに MIT で哲学の博士号を取得した後、現在はダートマス大学で研究している哲学者・脳神経科学者である。

³ Jeanette Kennett はモナッシュ大学で道徳心理学を中心に研究している哲学者である。Cordelia Fine は UCL で心理学の博士号を取得し、現在はメルボルン大学のフェローである。

⁴ Timothy Schroeder はオハイオ州立大学の哲学准教授である。Shaun Nichols はアリゾナ大学の哲学者であり、実験哲学 (Experimental Philosophy) を唱えている一人である。

第三節ではこの論争の延長上にある最近の議論を簡単に整理していく。

1. 論争の背景—発達心理学と道徳的動機づけ問題

最初に、脳神経科学の知見にもとづいた道徳判断と動機づけ問題をめぐる論争を紹介する前に、この論争の背景を簡単に確認しておこう⁵。それは発達心理学の知見を援用しながら道徳的動機づけ問題に取り組む一連の動向である。

道徳判断と動機づけ問題をあつかう従来のメタ倫理学の論議では、たとえば道徳判断を下すことができるものの道徳に無関心であるので、自ら下した道徳判断にしたがって行為するよう動機づけられることのない「無道徳主義者」

(amoralist) が内在主義に対する概念上の反例として仮定されてきた (Brink 1989: 46)。この想定では、無道徳主義者は〈 ϕ することは道徳的に正しい〉という判断を下したとしても、 ϕ する行為へと動機づけられることはない。

やがて、概念的・仮想的な無道徳主義者に加え、発達心理学における実例も用いられるようになった。それは「サイコパス」や「ソシオパス」と呼ばれる人たちである⁶。サイコパスとは、欺瞞・他者を操ること・他者の感情や権利などに対する無感覚さや無関心さなどによって特徴づけられる、発達性の精神疾患をもつ人を指す (Kennett and Fine 2008a: 189 endnote)。もしサイコパスたち

⁵ 論争の背景に関する記述はおおむね Kennett and Fine 2008a を参考した。

⁶ なお、アメリカ精神医学会が定めた DSM-III (『精神障害の診断と統計の手引き』第三版) 以降、「サイコパス」や「ソシオパス」よりも「反社会性人格障害」(Anti-social Personality Disorder) という言葉が使用されるようになった。最新版は 2000 年に公開された第四版の修正版 (DSM-IV-TR) である。本報告では、参照文献で使用されている「サイコパス」「ソシオパス」という言葉をそのまま用いることにする。

が誠実に道德判断を下しながら、その判断によって行為へと動機づけられることがないのであれば、現実世界における無道德主義者の類いと考えうるかもしれないので、彼らのような事例は動機内在主義にとっての躓きの石となるという主張も見られるようになった。

しかし、動機内在主義者たちの中には、サイコパスが〈 ϕ することは道德的に正しい〉と述べる場合の「正しい」という道德語ないし評価語が、引用符つき・規約的な意味であることを示唆する発達心理学の知見を引証して、サイコパスが実際には道德判断を下していないことを示そうとする者も現れた。引用符つき・規約的な意味とは、自分で道德判断を下しているのではなく、社会の他の人々がそう道德判断していたり、そう規約していたりするという意味である⁷。たとえば、この用法では〈道端に落ちていた財布を交番に届けるのは道德的に正しい〉は〈道端に落ちていた財布を交番に届けるのは世間一般では「道德的に正しい」とされている〉を意味している。そして、発達心理学を引き合いに出す動機内在主義者によれば、無道德主義者と同様に、サイコパスたちも引用符つき・規約的な意味で判断を下していると言える。すなわち、もしサイコパスたちが引用符つき・規約的な意味でしか判断を下せないのであれば、彼らはそもそも道德判断を下していないことになるから、彼らの判断に動機づけが伴わないとしても動機内在主義を脅かすものではないというわけである。

こう主張する際に、彼らのような動機内在主義者たちが参照したのは、たと

⁷ 「引用符つき」あるいは「カッコつき」の意味に関しては、Hare (1952: 124-6、邦訳 163-6) および Smith (1994: 67-8、邦訳 89-90) も参照のこと。

えばトレヴェサンとウォーカー (Trevethan and Walker 1989)、ブレア (Blair 1995)、ロバート・ヘア (R.D. Hare 1993) などの発達心理学研究である。まず、トレヴェサンとウォーカーの研究は、サイコパシーの傾向をもつ犯罪者たちとそうした傾向がみられない犯罪者たちを調べ、「状況 C に置かれている Aさんはどのように行為すべきですか？」というような第三者的視点を求める質問や、「あなたが仮に状況 C に置かれたとしたら、どのように行為しますか？」というような反事実条件的な質問を与えられたときの彼らの判断は、彼ら自身が置かれたことのある現実の状況や行為について下した判断と矛盾する傾向にあることを示した。次に、ブレアの道徳心理学研究は、発達性のサイコパシー傾向をもつ人はそうでない人と比べ、規約的な理由で不正と見なされている行為と、道徳的理由で不正と見なされている行為を明確に区別することができないことを明らかにした。最後に、R・D・ヘアはサイコパシー傾向をもつ受刑者たちを対象に以下のような質問を与え、彼らの応答を調査した。

Q: なぜ犯罪に手を染めるようになったのか。

A: それはお袋と関係がある。彼女は世界で最も美しい女性だよ。彼女は強かったし、4人の子どもを育てるために一生懸命働いたんだ。彼女はすばらしい女性なんだよ。俺は5年生の時に彼女の宝石類を盗むようになった。あのさ、俺はあのあばずれについては何一つ知っちゃいなかった。それで別々の道を進んだのさ。

Q : (別のサイコパス受刑者への質問) 殺人を犯したことについて後悔の念はありますか。

A : ああ、もちろん、後悔の念はあるさ。

さらに質問されると次のように述べた。

A : いや、心の中では悪い気はしていないね。

(Hare 1993: 40-1 邦訳 : 85, 88. ただし訳語等を若干変更した)

この会話に見られるように、母親の長所を述べながら「あばずれ」と呼んだり、「後悔の念」があると言っておきながら次の瞬間に「悪い気はしない」と述べたりすることは一貫性に欠けるだろう。以上のような経験的証拠を参照する動機内在主義者は、発達性のサイコパスたちが引用符つき・規約的な意味で判断を下していると主張した。つまり、この主張によれば、サイコパスたちは〈 ϕ することは道徳的に正しい〉と自分で判断しているのではなくて、「 ϕ することは道徳的に正しい」と引用符つきの意味、すなわち道徳的な理由ではなく規約的な理由で判断しているにすぎないと解釈することが可能である。だとすれば、彼らはそもそも道徳判断を下していないのであるから、その判断に動機が伴わなくとも動機内在主義にとっては何ら問題がないことになる。発達心理学にもとづいて動機内在主義を擁護する論者たちは、このようにして批判に応じてきた (たとえば Kennett and Fine 2008a: 173-8, 2008b: 219 を参照せよ)。

しかし、近年、道徳判断と動機づけ問題を心理学の研究成果から論じる流れ

にも変化が見られるようになった。というのは、脳神経科学の知見も踏まえてこの問題を捉え直す試みがなされるようになったからである。つまり、発達心理学だけでなく、脳神経科学の知見も取り入れて道徳判断と行為への動機づけの関係を論じる潮流が生まれたのである。そこでは、発達性のサイコパスに加えて、後天性のソシオパスとも呼ばれる、前頭前野腹側部 (ventromedial cortex) に障害をもつ成人の患者 (以下では VM 患者と略) などが焦点となる。

では、果たして VM 患者は動機内在主義に対する反例となりうるのか。あるいは、より広義に、脳神経科学の知見は内在主義にとって躓きの石となりうるのか。次節では、この問いをめぐる論争を概観することにしよう。

2. 道徳判断と動機づけ問題をめぐる新たな論争

2.1 強い動機内在主義に対するロスキーズの議論

脳神経科学の知見を取り入れた道徳判断と動機づけ問題をめぐる論争の火付け役の一人であるロスキーズ (Roskies 2003, 2008) の議論の要旨からまとめよう。彼女は VM 患者が動機内在主義に対する反例となりうるかと主張する⁸。ただし、以下 [2-2] で見るように、一口に動機内在主義と言ってもさまざまな形態がありうるので、ロスキーズが批判の矛先を向けている動機内在主義の形態をあらかじめ特定しておく必要がある。それは次のような動機内在主義である。

SMI : 行為者が状況 C において ϕ することが [道徳的に] 正しいと信ずる

⁸ ロスキーズの動機内在主義に対する反論は田口 (2007) も紹介している。

〔判断する〕ならば、その行為者はCにおいてゆるさう動機づけられる⁹。(Roskies 2003: 55, 2008: 191)

本報告ではこれを「強い動機内在主義」(以下 SMI と略)と呼ぶことにしよう。SMI は道徳判断(道徳的信念)と行為への動機づけには内在的・必然的な結びつきがあるとする立場である(Roskies 2003: 51)。たとえば、SMI にしたがうと、ある人が〈道端に落ちていた財布を交番に届けるのは道徳的に正しい〉と判断しているならば、そうするよう必然的に動機づけられることになる。つまり、SMI は、その人がたとえば意志の弱さや鬱状態などのために動機づけられない場合があることを否定する。SMI はこの点で強い主張である。なお、ロスキーズが批判対象として SMI に限定する理由については、マイケル・スミスの議論を中心に確認する箇所〔2-3〕で触れることにする。

さて、現実世界の無道徳主義者としてロスキーズが挙げるのは発達性のサイコパスではなく、VM 患者である(Roskies 2003: 55-59, 2008: 195-201)。前頭前野腹側部(以下 VM と略)は感情と言語認識に関わる神経系を仲介する機能をもつと考えられている。この脳の部位に損傷を負った患者だったと推測されているのは 19 世紀米国のフィニアス・ゲージである。ゲージは鉄道敷設現場の労働中、火薬の爆発で飛んできた棒が彼の頭を貫通してしまうという不慮の事故に遭遇したが、なんとか一命をとりとめた。しかも、彼には記憶・推論・会話・運動機能などに障害が見られなかった。その一方で、事故に遭う前には温厚な

⁹ 本報告の引用文中における〔 〕は報告者による補足である。

性格だった彼は、責任ある行動もとれなければ人間関係もろくに築くことのできない社会性を欠いた人間になってしまった¹⁰。そして、20 世紀も終りに近づく頃には、ゲージと同じような症状がみられる成人の VM 患者が脳神経科学的な研究の対象とされるようになった。

もっとも、VM 患者が SMI に対する反例になると主張するには、少なくとも第一に、VM 患者が道德判断を実際に下しうること、第二に、VM 患者の道德判断には動機が伴わないことを示す必要がある。そこで、次に、ロスキーズがこの二点について、どのような経験的証拠を提示しているかを確認することにしてしよう。

第一の点について、ロスキーズが主に参照するのは脳神経科学者であるダマシオらの一連の研究である。ダマシオらは脳手術を成功させるため止むを得ず VM 皮質に障害に負ってしまった成人の患者を研究した (Damasio et al., 1990)。この成人の VM 患者は記憶や言語といった認知的能力だけでなく、道德的推論能力にも問題はみられなかった。たとえば、この VM 患者の知能指数や記憶力はほぼ平均値 (97-99%) であったし、道德的推論に関する修正版コールバートテストの成績も非常に優れたもの (段階で言えば慣習的水準の後半から脱慣習的水準の前半) であった (Roskies 2003: 56, 64 endnote)。そのうえ、記憶力について言えば、新しい長期記憶を形成するのに必要な海馬に損傷を受けた成人の患者がその損傷を被る前に保存されていた記憶を保持しているのと同じように、成人の VM 患者も脳に損傷を負う前に獲得した道德的信念を保持している

¹⁰ フィニアス・ゲージに関する記述は鈴木 (2008: 257) も参照のこと。

と言える (Roskies 2003: 60, 2008: 198)。しかも、こうした記憶をもつ後天性ないし成人の VM 患者は先天性・発達性のサイコパスたちとは異なり、他者を欺いたり他者の権利などを意図的に無視したりする傾向にあるわけでもない (Roskies 2003: 58, 2008: 196-7)。ロスキーズはおおよそこれらの経験的証拠にもとづいて、こうした特徴をもつ VM 患者は道徳判断を実際に下すことができると主張する。

第二に、VM 患者は、約束を守る・自分の責任を果たすといった道徳的な状況下で適切に行為できないことも知られている。では、なぜそう行為できないのだろうか。ロスキーズによれば、それは VM 患者の道徳判断には動機が伴っていないからである。VM 患者は、たとえば他者と仲良くなったり、財政的に成功したりするための動機を抱くことができる一方で、道徳的動機を含む一定の動機を欠いている。この証拠としてロスキーズが挙げるのは、皮膚伝導反応 (以下 SCR と略) に関する脳神経科学研究である (Roskies 2003: 57-9, 64)。SCR は自律神経系から生じる反応であり、覚醒に関する生理学的な尺度としてウソ発見などにも使用されている。ダマシオらの VM 患者と非 VM の実験参加者を対象とした研究によると、非 VM 参加者たちは、たとえば戦争の犠牲者や被災者の写真といった感情的な反応を引き起こすような刺激に対して SCR を生じさせた一方で、VM 患者はそのような刺激に対して SCR を生じさせることはなかった。VM 患者が他の刺激を与えられたテストでは非 VM 実験参加者たちと同じように SCR を示したことを考えると、VM 患者の自律神経系に障害があるとは言えない。すると、VM 患者が道徳的な状況下で適切に行為できないのは、

SCR の欠如から説明できる。そして、SCR の有無が動機の欠如に関する脳神経科学的な指標であると解釈できるとしたら、VM 患者は道徳判断を求められるような状況下において判断を下しはするものの、SCR を生じさせることができないので適切な行為へと至ることはないと言明可能である (Roskies 2003: 57)。

このように、ロスキーズは脳神経科学の知見から、第一に、成人の VM 患者が道徳判断を実際に下しうること、第二に、こうした VM 患者の道徳判断には動機が伴わない(行為への動機が内在していない)ことを主張する。たしかに、SCR が道徳的動機の有無の証拠であるということはあくまでも仮説であり、その是非は脳神経科学の研究が進展するにつれてやがて明らかになることではある。しかし、それは少なくとも経験的に検証可能である (Roskies 2008: 199)。そして、第一の論点と第二の論点に関する脳神経科学的証拠から考えれば、VM 患者は誠実に道徳判断を下しはするものの、その判断には必ずしも動機が伴うとは言えない、すなわち、VM 患者の道徳判断と行為への動機づけは必然的なし内在的に結びついているわけではないと言える。こうして、ロスキーズは、VM 患者が SMI に対する反例になりうること、また、この反例から SMI が経験的に間違いであることが示せると主張する (Roskies 2003: 60, 2008: 192, 195)。

2.2 ケネットとファインの反論

続いて、脳神経科学の知見から動機内在主義を擁護しているケネットとファインの議論を簡単に見ることにしよう (Kennett and Fine 2008a, 2008b)。ケネットらの主要な議論は、第一に、ロスキーズが参照した脳神経科学的な証拠への

反論、第二に、ロスキーズが批判の矛先を向けた動機内在主義の形態への反論に大別することができるだろう。以下では、これら二つの反論を順番に要約していこう。

第一の反論として、ケネットとファインは VM 患者に関する脳神経科学の知見をめぐってロスキーズに疑義を挟み、上の〔2-1〕で確認したロスキーズの二つの論点、すなわち (1) VM 患者が道德判断を実際に下しうること、(2) VM 患者の道德判断には動機が伴わないことに関する経験的証拠に対して反論を展開している。順番は前後するが、ケネットらは (2) について SCR が動機づけの指標となるというロスキーズの主張が決定的なものとは言えないことも指摘している (Kennett and Fine 2008a: 187-8)。しかし、〔2-1〕で見たように、ロスキーズ自身はそれをあくまでも「仮説」と捉えており、その真偽が脳神経科学的証拠に開かれていることを認めている。そのうえ、動機内在主義を擁護するケネットらにしてみれば、無道德主義者や発達性のサイコパスの場合と同じように (1) を否定できればそれで十分であるはずである。実際のところ、ケネットらの反論の大部分は (1) に関するものに集約できるだろう。そこで、第一の反論（脳神経科学的な証拠に関する反論）について、VM 患者が本当に道德判断を下していると断定できるのか否かという問題に焦点を絞って概観していくことにする。

最初に、ケネットとファインは VM 患者の道德判断能力に問題がないとするロスキーズの主張に異議申し立てを行う (Kennett and Fine 2008a: 182-4, 2008b: 220)。本報告の第一節〔1-1〕で触れたブレアの発達心理学研究に見られるよう

に、サイコパスはそうでない人と比べ、規約的な理由（引用符付きの意味）で不正と見なされている行為と、道徳的理由で不正と見なされている行為を明確に区別することができない傾向にある。ケネットらによれば、これはサイコパスだけでなく VM 患者にもあてはまる可能性がある。たとえば、ダマシオらが対象とした VM 患者とは別の VM 患者を対象とした別の研究 (Blair and Cipolotti 2000) では、サイコパスと同じように VM 患者も引用符付き・規約的な意味と道徳的な意味を明確に区別できないことが報告されている (Kennett and Fine 2008a: 183-4)。このように、VM 患者の道徳判断能力には問題がないというロスキーズの議論には異論の余地がある。したがってまた、ロスキーズの主張に反して、(1) VM 患者が道徳判断を実際に下しうるとは断定できないことになる。

さらに、ケネットとファインは VM 患者が道徳判断を実際に下していると断定できないことを示すために、ロスキーズの参照した脳神経科学の知見が道徳判断と関連性をもっていることを疑問視する (Kennett & Fine 2008a: 182-8)。まず、彼女たちの指摘によれば、ダマシオらのものも含むいくつかの脳神経科学研究では、VM 患者は日常生活での意思決定一般に支障をきたしていると説明されている (Ibid: 184-6)。たとえば、VM 患者が自分の子どもを学校に迎えに行くのに失敗するのは、その約束を実行する道徳的動機を欠いているのではなくて、そもそもバスで行くか電車で行くかを決定できないからである (Kennett and Fine 2008b: 223)。つまり、VM 患者が誠実に〈約束を守ることは道徳的に正しい〉と判断を下してもその行為に至らないのは、道徳判断や道徳的動機づ

けの問題ではなくて、その行為を実行する際の意思決定一般に問題があるからである。

この問題に関してケネットらは、ロスキーズが引き合いに出したような VM 患者を対象とする実験の設定が、そもそも道德判断を促す状況であると断言できるのかと問う (Kennett and Fine 2008a: 187)。たとえば、ロスキーズは戦争の犠牲者・被災者・裸体などの写真を見た VM 患者の反応を調べるような実験の結果を参照しているが、これはそもそも道德的状況とは言い切れないのではないかとケネットらは指摘する。そのうえ、ロスキーズは、「状況 C に置かれている A さんはどのように行為すべきですか?」というような第三者的視点を求める質問や、「あなたが仮に状況 C に置かれたとしたら、どのように行為しますか?」というような反事実条件的な質問を与える実験における VM 患者の反応を道德判断として捉えていた。しかし、ケネットたちは、この種の質問を投げかける実験はそもそも SMI のような動機内在主義が前提にしている道德判断を調べるのには適していないと主張する (Kennett and Fine 2008a: 183, 2008b: 220)。先述したように、発達性のサイコパスと同様に VM 患者も引用符つき・規約的な意味と道德的な意味を明確に区別できない可能性がある。そして、なぜ VM 患者がそれを区別できないのかについて言えば、第一節 [1-1] で言及したトレヴェサンとウォーカーの発達心理学研究のように、第三者的視点から推論した場合や反事実条件的に推論した場合の VM 患者の判断は、やはり発達性のサイコパスと同じく自分自身が置かれたことのある現実の状況や行為について下した判断と矛盾する傾向にあるからだとも説明可能である。換言すれば、

彼らは第三者的視点の判断から一人称的視点のそれへ、反事実条件の判断から現実のそれへと翻訳できないのである (Kennett and Fine 2008b: 222)。だとすれば、第三者的視点や反事実条件的な推論を求めるような実験は、そもそも VM 患者に道徳的な意味ではなく、引用符つき・規約的な意味で判断を下すように促してしまう可能性が高い。したがって、ケネットとファインによれば、ロスキーズが依拠した実験ではそもそも VM 患者が道徳判断を実際に下しているとは断定できないのであるから、仮に SMI が唯一の動機内在主義の形態であるとしても、やはり直ちに SMI が反証されるわけではない (Ibid: 218)。このようにして、ケネットとファインはロスキーズによる SMI 批判を斥けようとしている。

しかし、ケネットとファインの議論はここで終わらない。上述したように、彼女たちによれば、VM 患者の道徳判断を調べるには反事実条件的な場面における三人称の判断ではなく、現実の場面における一人称の判断を求めるような実験でなければならない (Kennett and Fine 2008a: 181-3, 2008b: 220)。つまり、これ以外の実験デザインを用いている VM 患者を対象とする実験は、そもそも SMI をはじめとした動機内在主義を確証したり反証したりするような、科学哲学でいう決定実験の類いではないと彼女たちは主張する。こうして、ケネットとファインはロスキーズの SMI 批判に対して反論を展開したわけだが、一方で、動機内在主義を擁護しているはずの彼女たちが、なぜそれを検証するための実験デザインについて議論を長々と展開する必要があったのだろうか。この疑問に答えるためには、ケネットたちの第二の論点、すなわちロスキーズが批判の矛先を向けた動機内在主義の形態に対する反論を確認しなければならない。

第二の論点について、ケネットとファインはロスキーズによる SMI 批判を斥けようとする一方で、SMI 自体は受け入れずに、代わりに自分たちが支持する動機内在主義の形態を提示する。それは「弱い動機内在主義」の一種（以下 K&F WMI と略）である。K&F WMI の特徴づけはマイケル・スミスものが分かりやすいので、それを引用することにしよう。

K&F WMI: 他の条件が等しければ、ある行為者が、自分が状況 C において ϕ することは正しいということを現実の場面 (in situ) で判断する、すなわち、自分が C という状況下に置かれていると信じて、状況 C において ϕ すべきであると判断するならば、その行為者は ϕ するよう動機づけられる。

(Smith 2008: 208)

まず、なぜ K&F WMI が SMI とは異なり「弱い」動機内在主義に分類されるかと言うと、それは「他の条件が等しければ」という但し書きが入っているためである。つまり、SMI は、行為者が誠実に〈 ϕ することは道徳的に正しい〉と判断を下しているとしたら、その行為者が必然的に動機づけられると主張するのに対して、K&F WMI は SMI の「必然的に」を「他の条件が等しければ」で置き換えることによって、行為者が誠実に道徳判断を下しているとしても、他の条件を満たさなければその行為者が動機づけられない場合もありうることを認め譲歩している。この点で、K&F WMI は SMI よりも弱い主張を行う。

次に、K&F WMI が SMI と異なるのは、行為者が道徳判断を求められる状況

Cが「現実の場面」でなければならないとする点である。上で確認したように、これはロスキーズが参照した脳神経科学の知見に対するケネットらの異議申し立てに関係している。再び確認しておく、ケネットとファインの見解では、動機内在主義を検証できるような経験的テストは、道德判断として、反事実条件的な場面における三人称の判断ではなく、現実の場面における一人称の判断を求めるようなものでなければならない (Kennett and Fine 2008b: 223)。というのも、これ以外の実験デザインでは、VM患者などの行為者が誠実に道德判断を下しているかどうか判然としないからである¹¹。これで留保しておいた問いに答えることができる。すなわち、ケネットたちが K&F WMI を提唱する理由は、ロスキーズによる SMI 批判を回避すると同時に、動機内在主義を経験的に検証できる形で提示するためである¹²。

こうして、ケネットとファインは K&F WMI が SMI よりも弱い主張を行う立場であること、さらに動機内在主義を経験的に検証するためには、K&F WMI にもとづいた実験デザインでなければならないことを唱える。しかし、こうしたケネットとファインの立場はロスキーズのそれとあまり変わらないのではないか。さらに言えば、K&F WMI は果たして動機内在主義の優れた形態である

¹¹ ただし、ケネットとファインは、道德判断を現実の場面で特定できるような実験を設定するのは事実上困難であるから、反事実条件的な道德判断を求めるような実験を用いざるをえないだろうと譲歩している (Kennett and Fine 2008b: 224)。

¹² もっとも、本報告では立ち入れないが、ケネットとファインが K&F WMI を提示したことには別の意図もありそうである。というのは、彼女らのスミスへの応答を見れば、部分的にはスミス流の理由内在主義 (概念的理性主義) にまつわる問題 (たとえば、合理的で理想的な自分が下す判断と現実の自分が下す判断があまりにもかけ離れてしまう恐れがあり、その場合には前者と後者の判断の関係性が薄れてしまうという問題など) を回避したいという意図も見え隠れしているからである (Ibid: 219)。なお、この点については本報告脚注 14 も参照のこと。

のか、はたまたその一種と言えるのだろうか。これらの疑問は残る。そこで、次節では、これらの疑問についてロスキーズおよびケネットとファインの議論に加えて、彼女たちに対するマイケル・スミスの反論を概観することにしよう。

2.3 経験的証拠とスミスの反論

当然のことながら、ロスキーズはケネットとファインに対して「反事実条件的な状況に関する道徳判断も道徳判断である」と主張し、K&F WMI に異議を唱える (Roskies 2008: 195)。この反論についてロスキーズは、道徳判断と行為への動機づけの関係における「必然性」こそが動機内在主義と外在主義を区別する点であるのだから、ケネットらの K&F WMI のように「必然的に」を「他の条件が等しければ」で置き換えてしまうと、それを動機内在主義の一形態として認識できなくなると主張する (Ibid.)。つまり、K&F WMI は、現実の場面における行為者が一人称的視点から〈 ϕ することは道徳的に正しい〉と判断を下しながら必ずしもそうするよう動機づけられるわけではないことを認めているので、道徳判断と行為の動機の関係が内在的・必然的であると主張する動機内在主義よりも、むしろその関係が外在的・蓋然的であると唱える外在主義の方に近い立場になってしまうというわけである。

こうしたロスキーズの反論にある程度歩調を合わせつつ、マイケル・スミスは K&F WMI は内在主義の優れた形態でもなければ、その一形態ですらないとも論じている (Smith 2008: 210-1)。スミスによれば、ケネットとファインのように、道徳判断と動機のあいだの概念的で必然的な結びつきを現実の場面にお

ける「他の条件が等しければ」によって弱めることはそもそも内在主義の擁護にはならない。たとえば、道徳判断を支える心理状態と動機づけを結びつける蓋然的な心理学的法則があると想定すると、現実の場面において道徳判断を支える心理状態が因果的に作用する場合に「他の条件が等しい」ということになるだろう。すると、K&F WMI が確証されうるのは、こうした蓋然的な心理学的法則が現実存在する場合になるだろう。たしかに、SMI のような強い立場ではなく弱い動機内在主義という点に限ってみれば K&F WMI は SMI よりも優れているように思われる (Ibid: 208)。しかし、スミスによると、K&F WMI のように道徳判断と動機づけの結びつきを心理学的で蓋然的な経験的証拠にもとづけることは、まったく内在主義の擁護にはならない。なぜなら、内在主義が内在主義であるためには、道徳判断と行為への動機づけとの結びつきにはある種の概念的な必然性がなければならないからである (Ibid: 210)。

もっとも、スミスはロスキーズと同じくケネットとファインが提示した弱い動機内在主義 (K&F WMI) を斥ける一方で、ロスキーズが批判の矛先を向けた強い動機内在主義 (SMI) も捨て去る。というのは、先の「概念的な必然性」という言葉にも表れているように、スミスの擁護する内在主義は道徳判断と見なされるものに対するア・プリオリな制約として働く想定されているので、経験的な証拠に依拠するのではなく、道徳判断それ自体の内容に依拠しているからである (Ibid.)。

この点はおそらく補足説明が必要だろう。そこで、本報告の目的に沿う範囲内でスミスの理由内在主義 (reason internalism) をごく簡単に確認することにし

よう。スミスは「行為者が状況 C において ϕ することが正しいならば、その行為者には C において ϕ する理由がある」とし、道徳判断の内容を理性（合理性）の要求として捉える理性主義の立場をとる（Smith 1994: 62, 邦訳 81）。このように、スミスは道徳判断の内容を〈 ϕ する規範的理由がある〉ということと同一視し、規範的理由という道徳語の概念分析を通じて、道徳判断（価値判断）の内容を、行為者が合理的であるならば抱くであろうような欲求に関する信念であると捉える。つまり、行為者が現実の場面ではなく、間違った信念を抱いていないといった一定の合理性の要件を満たした理想的な状態にある場合に下すであろうような判断が、スミスの言う規範的理由であり道徳判断である。すると、スミスの言う道徳判断に内在するのは行為への動機（欲求）ではなく規範的理由（信念）である。この点でスミスの立場は理由内在主義とも呼ばれる。

厳密に言えば、このようにスミスの理由内在主義は動機内在主義とは別ものである。ただし、スミスによれば、理性主義は次のような弱い動機内在主義（以下 WMI と略）を含意する¹³。

WMI: ある行為者が、自分が状況 C において ϕ することは道徳的に正しいと判断するならば、その行為者は C において ϕ するよう動機づけられるのであり、さもなければ、その行為者は実践的に非合理的である、というのは概念上必然的である。（Smith 1994: 61, 邦訳 81; 2008: 211）

¹³ ただし、スミスによれば、WMI は理性主義を必ずしも含意するわけではない。たとえば、R・M・ヘアのような表出主義者は感情主義を採用して、理性主義を否定しながら WMI を受け入れることが可能である（Smith 1994: 62-3, 邦訳 82-3）。

この WMI を含意する理由内在主義では、ある人が〈ゆすることは道徳的に正しい〉という規範的理由をもっていたとしても、その理由によっては動機づけられないことが実際にありうることを認めうる。この点で WMI はロスキーズが批判した SMI とは異なる。というのも、SMI は行為者が意志の弱さや鬱状態などのため動機づけられないことがあることを否定するが、WMI はそれを肯定するからである (Smith 2008: 211)。この点に限れば、たしかにスミスの理由内在主義には WMI の要素が含まれているし、しかもそれは強い動機内在主義 (SMI) を修正し弱めたものである。しかし、スミスの WMI の定式化を見ても分かるように、そこではサイコパスであるか VM 患者であるかを問わず、行為者が道徳判断を誠実に下していても行為へと動機づけられないのは、動機の問題というよりはむしろ合理性 (理性) の問題ということになる。これは WMI における「概念上必然的である」という文言にも表れている。そして、スミスは、こうした理由内在主義を念頭に置いて「内在主義は道徳判断と見なされるものに対するア・プリオリな制約として働く」と述べているのである。

このように、スミスの理由内在主義は概念的ないしア・プリオリな次元の内在主義であるので、その真偽はサイコパスや VM 患者などに関する経験的証拠によっては左右されないはずである (Kennett and Fine 2008b: 225 endnote) ¹⁴。

¹⁴ なお、このことはスミスの理由内在主義にはまったく問題がないという意味ではない (本報告脚注 12 も参照のこと)。また、本報告では立ち入ることはできないが、成功しているかどうかは別にして、S・ニコルズはスミスの概念的理性主義 (conceptual rationalism) における概念分析の出発点である人々の常識的真理 (platitude) について、現実の人々がそうした概念上の真理を実際に抱いているかどうか経験的に調べ、こうした経験的証拠からスミスの理由内在主

にもかかわらず、ロスキーズはスミスのような理由内在主義を「哲学的面白みに欠ける」として斥け、代わりに経験的証拠によって反証できるかもしれない SMI を批判の対象とした (Roskies 2003: 51)。だとすれば、結局のところロスキーズが言わんとしているのは〈経験的証拠によって左右されない哲学的議論は面白みに欠ける〉ということだろう。実際、彼女は「経験的データがメタ倫理学の問題に関連性をもちうる」ことを強調している (Ibid: 63)。だが、スミスにしてみれば〈経験的証拠によって左右されなくとも興味深い哲学的議論は提示できる〉と応じうるだろうし、事実、スミスはそうしている (Smith 2008: 212-5)。

他方で、ロスキーズと同様に、脳神経科学の知見を援用してメタ倫理学上の論争に参戦しようとする論者は続々と現れている。たとえば、ケネットとファインも「私たちはロスキーズの証拠と彼女の提示する道徳判断の説明には異論を唱えたが、彼女のプロジェクトには異議申し立てをしていない」と述べている (Kennett and Fine 2008b: 219-20)。すなわち、脳神経科学の研究成果にもとづいて従来のメタ倫理的な問題を吟味しようとする路線に限定して言えば、ケネットとファインもロスキーズに賛同していると言える。どうやら彼女たちは、発達心理学や脳神経科学で得られた経験的証拠によって、道徳判断と動機づけ問題に関するメタ倫理的・哲学的議論が左右されうると考えているようである。次節では、この方向性を推し進めている別の例を挙げることで、近年

義に対しても疑義を挟んでいる。この議論については Nichols (2002) および Kennett (2006) を参照のこと。

みられる道徳判断と動機づけ問題の新たな側面をさらに概観することにしよう。

3. 道徳判断と動機づけ問題における新たな側面

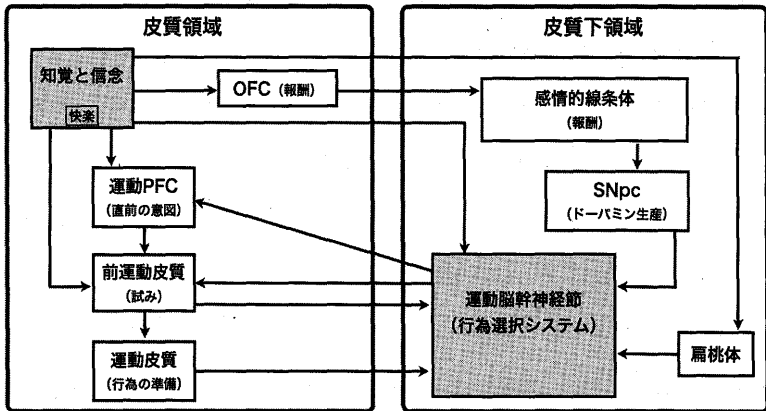
3.1 道徳的動機に関する脳神経科学

脳神経科学の研究は日進月歩である。そして、その速度に応じて、脳神経科学の知見を用いてメタ倫理学上の議論を吟味しようとする流れも勢いを増しているようである。本節では、シュローダー・ロスキーズ・ニコルズ (Schroeder, Roskies, and Nichols 2010) らの主要な論点のいくつかを要約することで、こうした現状を概観することにした。彼らが対象としているメタ倫理学上の立場は複数あるが、ここでは前節で扱った強い動機内在主義 (SMI)、すなわち〈φすることは道徳的に正しい〉という信念によって道徳的動機が内在的・必然的に生じると捉える立場に限定して彼らの議論を要約することにする¹⁵。シュローダーらにおいては、SMI のような動機内在主義は、〈道徳的動機は正しい行為に関する信念から始まる〉とし、少なくとも道徳的に価値ある行為について言えば、信念はいかなる先行する欲求とも関係なしに動機へとつながると捉える「認知説」(cognitivism) に分類されている (Ibid: 76)。このため、本節では彼らの分類で言う認知説に関する議論を中心に見ていく。

ここでは、以下の図を参照しながら、シュローダーらがまとめている脳神経科学 (脳神経生理学) の研究成果を簡単に確認することにしよう (Ibid: 79-84)。

¹⁵ たとえば、シュローダーらはメタ倫理学の立場として、道具主義 (instrumentalist)、認知説 (cognitivist)、感情説 (sentimentalist)、性格説 (personalist) を取り上げて吟味している。

図：皮質領域と皮質下領域 (Schroeder, Roskies, and Nichols 2010: 80)



シュローダーらによれば、脳神経科学的に考えた場合、SMIのような動機内在主義（認知説）にとって問題となるのは、道徳的信念を生み出す脳の構造が動機づけられた状態を生み出す脳の構造に直接的に影響を及ぼすかどうかである（Ibid: 88）。決定的な結論ではないものの、道徳的信念は皮質領域の「知覚と信念」という高次の認知的構造において生み出されることが大体わかっている。この高次の認知的構造において、何かを指で触ったり恋人と似た誰かを見ていたりといった身体的・視覚的な情報が入力され、道徳的信念を含めた何らかの信念が形成されると考えられている。そして、動機づけられた状態に深く関係する脳の構造は皮質領域の「前運動皮質」と「運動皮質」、さらに皮質下領域の

「運動脳幹神経節」である。前運動皮質は行為の試み（態勢）に、運動皮質は行為の準備に関係している。また、運動脳幹神経節は可能な行為の選別に深く関係している。たとえば、前運動皮質が幼い子供をたくさん抱えている状態だと仮定してみよう。すると、〈あれをしたい〉〈これをしたい〉と騒ぎ立てる子供たちを黙らせ、〈望むように行為する〉ことを許される子供を選別する教師の役割を担うのが、運動脳幹神経節である。

さて、シュローダーたちの脳神経生理学的な説明はさらに続くのであるが、ここで理解しておく必要があるのは次の点だけである。すなわち、道徳的信念を生み出す脳の構造が動機づけられた状態を生み出す脳の構造に直接的に影響を及ぼすような脳のメカニズムがあるかどうか、そして、そのメカニズムが欲求を生み出す脳の構造とは独立して動機づけられた状態を生み出す脳の構造と結びついているかどうかである。シュローダーらが SMI のような動機内在主義（認知説）について問題視しているのはこれらの点である。そして、上の図を参照すれば、そうしたメカニズムは脳神経生理学的には存在していることになる。つまり、信念に関係する脳構造（皮質領域の知覚と信念）と動機づけに関する脳構造（皮質領域の前運動皮質と運動皮質、および皮質下領域の運動脳幹神経節）は解剖学的に結合しており、しかもこの結合は報酬系（OFC・感情的線条体・SNpc など）で実現される内在的欲求（快楽への欲求などのようにそれ自体のために欲求されるような欲求）の影響を回避しているとも考えうる（Ibid: 75, 89）。とすれば、脳神経生理学的に言えば、道徳的信念はどのような欲求とも関係なしに行為の動機へと結びつくとする動機内在主義（認知説）にも一理

あるということになりそうである。

しかし、シュローダーらは、道徳的信念が報酬系（内在的欲求の実現）とは関係なしに直接的に道徳的動機につながるという理論上の可能性は残るものの、SMIのような動機内在主義（認知説）にはそれでも問題があると主張する（Ibid: 93-8）。彼らの根拠はおおむね以下のとおりである。第一に、パーキンソン病を患った人は内在的欲求を失うことが知られているが、その人はいかなる行為にも動機づけられることはない。だとすれば、内在的欲求は健常人間が動機を生み出すのに必要であるように思われる。第二に、内在的欲求とは関係なしに動機が高次の認知的構造（皮質領域の知覚と信念）から導かれることは可能ではあるけれども、それはトゥレット・シンドローム（顔・頸・肩などの筋のリズムカルな不随意的収縮を反復する症状で、チック症とも呼ばれる）の事例だけである。第三に、本報告第二節〔2-1〕で見た VM 患者の存在である。第四に、第一節で見たサイコパスの存在である（最近の研究では大脳辺縁系の障害がサイコパシーと相関関係にあることが示唆されている）。

シュローダーたちによれば、これらの問題を考慮すると、脳神経科学からの証拠で一番困ることになりそうなのは、メタ倫理学上の立場の中でも SMI のような動機内在主義（認知説）である（Ibid: 93）。たしかに、シュローダーらは以上の問題群から動機内在主義（認知説）が直ちに反証されるわけではないと譲歩しているようにも見える。しかし、彼らはさらに一歩踏み込んで、自分たちの試みが道徳判断と動機づけ問題をめぐるメタ倫理学上の議論全体を左右しうるとも主張している。以下では、この主張を中心にして若干の検討を加える

ことにしよう。

3.2 メタ倫理学的理論と経験的証拠をめぐる問題

シュローダーたちは、脳神経科学の知見が道德判断と動機づけに関する問題を左右しうるのかと自問し、それに対し「イエス」と答えている (Schroeder, Roskies, and Nichols 2010: 90)。彼らによれば、道德的動機を含む精神状態に関する哲学的理論は因果関係の主張も含んでいるから、脳神経科学はそうした理論に制限を加えうる (Ibid.)。シュローダーらの言う道德判断と動機づけ問題をあつかう哲学的理論 (メタ倫理学的理論) には、もちろん内在主義の何らかの形態も含まれる。たとえば、彼らは上で確認した認知説 (内在主義) を支持する論者の中にマイケル・スミスも含めている (Ibid: 76)。

しかし、果たしてそう言い切れるのだろうか。なるほど、ロスキーズが批判の矛先を向けた強い動機内在主義 (SMI) やケネットとファインの弱い動機内在主義 (K&F WMI) は経験的証拠にもとづく因果関係の主張を含んでいると言えるだろう。しかし、第二節 [2-3] で見たように、スミスならば、メタ倫理学上の内在主義 (理由内在主義) は物理的な脳の構造ないしは心理学的法則に関わるような因果関係の主張を含んではないと異論を唱えるはずである。このように、理論それ自体の是非は別にしても、スミスの理論を考慮すれば、少なくともメタ倫理学の理論の中には経験的証拠によっては左右されないものもある。そして、本報告第二節でみたロスキーズおよびケネットとファインと同じように、この点でシュローダーたちの主張もスミスのそれと平行線をたどって

おり、どうやら両者の直線が交わることはなさそうである。それゆえ、脳神経科学の提示する経験的証拠が道徳判断と動機づけ問題をめぐるメタ倫理学上の議論全体を左右するという、シュローダーたちの主張には議論の余地がある。

もっとも、スミスのような理由内在主義を除けば、ケネットとファインやシュローダーたちが肯定するように、発達心理学や脳神経科学を通じて明らかにする経験的証拠が道徳判断と動機づけ問題をあつかうメタ倫理学的理論に何らかの影響を与える可能性はあるだろう。また、本報告では立ち入れなかったが、これらの経験的証拠に重心を移す彼らの試みは、スミスのように、実証的研究とは独立に〈正しい〉をはじめとした道徳語の概念分析に専心してきた従来のメタ倫理学上のひとつの方向性に対して、何らかの反省や軌道修正を求めるような動きと連動しているのかもしれない¹⁶。とはいえ、本報告で見てきたように、経験的証拠にもとづいて道徳判断と動機づけに関するメタ倫理学上の理論を吟味しようとする一連の動向は、そうした理論の真偽を問うには経験的証拠が不可欠であるという前提を置いたうえで論議を進め、経験的証拠に左右されないメタ倫理学的理論を排除しようとしているようにも見える。だが、少なくともスミスの理論を考慮すれば、メタ倫理学上の議論においてはこの前提こそが大問題なのではなかろうか。

4. おわりに

本報告では、道徳判断と動機づけ問題に関する新しい側面を概観してきた。

¹⁶ この動きについては本報告の脚注 12 および 14 を参照のこと。

この新たな動きは無視できないほど大きくなってきている。このことは、その文献の数がますます増えつつある現状を見れば分かる。しかし、少なくとも現時点では、ロスキーズ、ケネットとファイン、シュローダーやニコルズをはじめとした、発達心理学や脳神経科学を通じて明らかになる経験的証拠が道德判断と動機づけ問題をめぐるメタ倫理学上の論争を左右するという一連の動向と、そうした証拠によってはこの問題は左右されないとするマイケル・スミスの議論が平行線をたどっていることは否めない。

しかし、だからといって、発達心理学や脳神経科学の知見を蔑ろにすべきではないだろうし、本報告で見た道德判断と動機づけ問題に関する新しい動きが何らかのメタ倫理学上の議論に何らかの影響を及ぼす可能性を完全に否定することもできないだろう。本報告で概観した道德判断と動機づけ問題に関する新たな動きはますます勢いを増すだろうと思われるので、これからもこの動向に注意を向ける必要はありそうである¹⁷。

(やまもと けいいちろう 立命館大学非常勤講師)

¹⁷ 本報告のドラフトに関して、2010年12月19日に立教大学で開催されたモラル・サイコロジー研究集会に参加された方々に有益なコメントを頂いた。参加者のみなさんに感謝したい。

参考文献

- Blair, R. J. R. (1995), "A Cognitive Developmental Approach to Morality: Investigating the Psychopath," *Cognition*, 57: pp. 1-29.
- Blair, R. J. R., and Cipolotti, L. (2000), "Impaired Social Response Reversal: A Case of "Acquired Sociopathy," *Brain*, 123 (Pt. 6), pp. 1122-1141.
- Brink, D. (1989), *Moral Realism and the Foundation of Ethics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (1997), 'Moral Motivation,' Symposium on Michael Smith's *The Moral Problem*, *Ethics*, vol. 108, No. 1, pp. 4-32.
- Damasio, A. R., Tranel, D. and Damasio, H. (1990), 'Individuals with sociopathic behavior caused by frontal damage fail to respond autonomically to social stimuli,' *Behavioral Brain Research*, 41, pp. 81-94.
- Hare, R. M. (1952), *Language of Morals*, Oxford: Oxford University Press. [小泉 仰・大久保正健訳、『道徳の言語』、勁草書房、1982 年]
- Hare, R. D. (1993) *Without conscience: The Disturbing world of the psychopaths among us*, New York: Pocket Books. [小林宏明訳、『診断名サイコパス』、早川 書房、2000 年]
- Illes, J. (2006) 'Preface,' in Judy Illes (ed.), *Neuroethics: Defining the Issues in Theory, Practice, and Policy*, New York: Oxford University Press.
- Kennett, J. (2006) 'Do Psychopaths Really Threaten Moral Rationalism?' *Philosophical Explorations*, vol. 9, No. 1, pp. 69-82.

- Kennett, J. and Fine, C. (2008a) 'Internalism and the Evidence from Psychopaths and "Acquired Sociopaths",' in Walter Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, vol.3, Cambridge: The MIT Press, pp. 173-190.
- (2008b) 'Could There Be an Empirical Test for Internalism?' in Walter Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, vol.3, Cambridge: The MIT Press, pp. 217-225.
- Nichols, S. (2002) 'How Psychopaths threaten moral rationalism: Is it irrational to be amoral?' *Monist* 85, pp. 285-304.
- Nichols, S. and Knobe, J. (2008) *Experimental Philosophy*, Oxford: Oxford University Press.
- Roskies, A. (2003) 'Are ethical judgment intrinsically motivational? Lessons from "acquired sociopathy",' *Philosophical Psychology*, vol. 16, No. 1, pp. 51-66.
- (2008) 'Internalism and the Evidence from Pathology,' in Walter Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, vol.3, Cambridge: The MIT Press, pp. 191-206.
- Schroeder, T. Roskies, A, and Nichols, S. (2010) 'Moral Motivation,' in John M. Doris and the Moral Psychology Research Group (eds.), *The Moral Psychology Handbook*, Oxford: Oxford University Press, pp. 72-110.
- Smith, M. (1994) *The Moral Problem*, Malden: Blackwell Publishing. [樫則章監訳、『道徳の中心問題』、ナカニシヤ出版、2006年]
- (1997) 'In Defense of *The Moral Problem*: A Reply to Brink, Copp, and Sayre-McCord,' *Ethics*, vol. 108, No. 1, pp. 84-119.

---(2008) 'The Truth about Internalism,' in Walter Sinnott-Armstrong (ed.), *Moral Psychology*, vol.3, Cambridge: The MIT Press, pp. 207-215.

Trevethan, S.D., and Walker, L.J. (1989), 'Hypothetical versus Real-life Moral Reasoning among Psychopathic and Delinquent Youth,' *Development and Psychology Research*, pp. 285-311.

伊勢田哲治、「道徳的人格を演じること―役割理論の動機内在主義への含意―」、
ドラフト (2010 年 12 月 13 日)

鈴木貴之、「脳神経科学からみた刑罰」、信原幸弘・原塑編、『脳神経倫理学の展望』、勁草書房、2008 年、pp. 255-281.

田口周平、「VM 障害と動機内在主義について」、『先端倫理研究：熊本大学倫理学研究室紀要』、2007 年 3 月、pp. 141-59.

林芳紀、「脳倫理学のなかの倫理学者」、『実践哲学研究』、第 30 号、2007 年、pp. 71-94.